

昔むかし、大里<sup>おほさと</sup>深沢<sup>ふかざわ</sup>の村はずれの一軒

家に、とても素晴らしい器量よしの婿がいた。したがつて、嫁（女房）もまたすごい美人であった。ところがこの婿様、顔やすがたに似ず頭の中味が低く、誰からも「おろか婿」の名で呼ばれていた。

ある時、女房の実家の縁日<sup>えんにち</sup>によばれ、色々な品々御馳走を出されたが、その中でも「だんご」が一番で、ベロもへソもぬけるほどうまかった。

この婿様、この味が忘れられず、女房に作らせ、また食つてやろうと「だんご、だんご……」と口の中でくり返しながら、家路の帰りを急いだ。

がけてボーンと強く一撃<sup>いっげき</sup>を食わした。

婿様は痛い痛いと両手で頭をおさえ大苦しみ。しばらくたつて、女房が婿様の頭を見て「アラッ、だんごのようなコブが大きく出来たワ」と言つたその途端、この婿様半泣きの大聲で「そのだんごのことだ」と叫んだという。

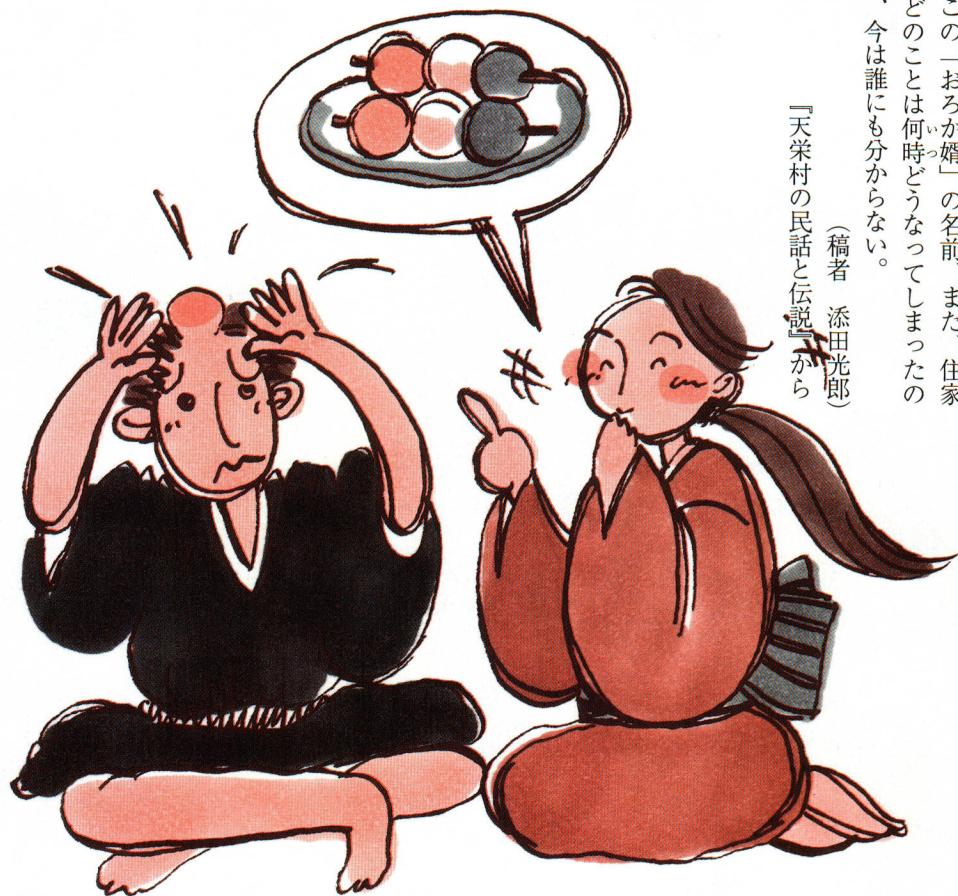
この「おろか婿」の名前、また、住家などることは何時どうなつてしまつたのか、今は誰にも分からぬ。

（稿者 添田光郎  
『天栄村の民話と伝説』から）

## おろか婿

●深沢

民話 4



一軒家のために道は悪く、あいにく雨あがりであつたので、路面に深い水たまりが出来ていた。婿様は、いつもの調子で「どっこいしょ」と飛びこした。そのままに「だんご」が「どっこいしょ」と変わつてしまい、家に着くや「どっこいしょ」を作れと女房に言つた。言われた女房は何がなんだかさっぱりわけが分からず、「一つ言い」「一つ言いで、つい二人は大口論となつた。

たまたま外出先から帰宅した母親が、このさわぎの事情を知るや「おろかもの」と叱り、次の瞬間かたわらにあつた太々とした「すりこぎ棒」で、婿様の脳天め